藝大通信

02
MARCH
2002

TOKYO
GEIDAI
東京芸大広報誌

特集 大学は世界と対話する

座談会　グローバル社会と芸術文化創造
川俣正・島田文雄・鈴木雅明・若杉弘

私たちの国際交流
ソウル大学校美術大学との交流展
ヨーロッパ・ピアノ・フォーラム2001
国立ウィーン音楽演劇大学との交流オペラ公演
中国から派遣され壁画保存を研究
日本の伝統音楽を調査するためイギリスから留学

開かれた大学
TAP 取手アートプロジェクト

学生のいる風景
オペラ・プロジェクト「ドン・ジョヴァンニ」

「Noi Ami Amo」
1997　Mixed media on canvas 200F

絹谷幸二（きぬたに・こうじ）

1943年奈良県生まれ。68年東京芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了。87年美術学部絵画科講師、89年助教授、93年教授。
2001年、洋画「蒼穹夢譚（そうきゅうむたん）」（平成12年独立展）に対して第57回日本芸術院賞が授与され、さらに日本芸術院会員に選出された。

東京芸術大学広報誌　藝大通信第2号

編集発行　東京芸術大学広報委員会
編集委員　野田暉行（副学長・音楽学部作曲科教授）
長谷部浩（美術学部先端芸術表現科助教授）
渡邊健二（音楽学部器楽科助教授）
永井⌀ 夫（事務局長）
アートディレクター　蓮見智幸（美術学部デザイン科助教授）
制作　株式会社　平凡社
発行日　平成14年3月31日

お問い合わせ先
東京芸術大学総務課
〒110-8714　東京都台東区上野公園12-8
電話　03-5685-7509　　FAX　03-5685-7760
e-mail　jkikaku@off.geidai.ac.jp　　URL　http://www.geidai.ac.jp

第2号目次

3　学長就任にあたって　平山郁夫

特集 大学は世界と対話する

4—9　座談会 グローバル社会と芸術文化創造
川俣正・島田文雄・鈴木雅明・若杉弘

10—12　インタビュー 私たちの国際交流
ソウル大学校美術大学との交流展／ヨーロッパ・ピアノ・フォーラム2001／国立ウィーン音楽演劇大学との交流オペラ公演／中国から派遣され壁画保存を研究／日本の伝統音楽を調査するためイギリスから留学
姉妹校・大学間交流締結校一覧

13　NEWS 2001.10〜2002.3

14—15　タイムカプセルに乗った芸大
【第2回】1911〜1920年
佐藤道信〈東京美術学校1912年〉
瀧井敬子〈東京音楽学校1912年〉

16—17　開かれた大学②　TAP 取手アートプロジェクト
渡辺好明

18—19　学生のいる風景②
オペラ・プロジェクト「ドン・ジョヴァンニ」　泉貴子

芸大短信2002．4〜2002．6

20—21　春から夏への大学美術館
〈洋画〉の青春群像／アフガニスタン1000年の歴史（仮称）／芸大コレクション展

22—23　春から夏への奏楽堂
「熊野の物語」／歌シリーズ2002イタリア歌曲の夕べ I

藝大通信

No.02

TOKYO GEIDAI
東京芸術大学広報誌

第2号刊行にあたって

編集委員長就任のご挨拶を兼ねて

芸大は多彩な面を持った大学です。

教育、研究、学生、教官、組織、施設等々、すべてに亘って、既成の大学概念では一律に律しきれない多様さが混在し、独自の形態を保っております。一つ一つの細胞である個人の多様さの集積がそれを構成していると言ってもよいでしょう。

この機関誌は、それらをわかりやすい形で少しずつご紹介しつつ、未来に向けて芸大が何を果たすべきかを考えようとするものです。

今号第2号では、特集として「国際性」という一面に焦点を当て活動をご紹介するとともに、そのアイデンティティを思考しております。もとより、連載記事、種々の芸大情報等も満載し、情報誌としてもお役に立つものにいたしました。

芸大の歩みは、あたかも草木に水を遣る如く、毎日弛まなく続けられている歩みですが、おそらくそれが花を咲かせ結実するには、10年、20年という長い年月を要することでしょう。しかしそれは、国の文化を担う、言ってみれば国を担うものであると自負しております。この機関誌が、その真意の理解への一助になればと念願するものです。

どうぞご意見ご感想をお寄せ下さい。

藝大通信編集委員長
副学長（企画担当）
野田暉行

学長就任にあたって

東京芸術大学長　平山 郁夫

私は、平成七年十二月二十日、六年間の学長任期を終えて退官しました。六年後、思いもかけず再び東京芸術大学長に就任することになりました。

今、国立大学は、独立行政法人化を控えて、大学改革のただ中にあります。学長退官後のこれまでの活動を通じて、外部から客観的に大学を見ることのできた私に、再登場の白羽の矢がたったのでしょう。私は、母校に育てられたご恩返しの気持ちから、引受けました。

大学改革は、トップダウンによる形式でなく、本来なら時代に沿い、自らの努力で教育研究の充実を図っていかなければなりません。

戦後の新制大学教育や制度も、半世紀を過ぎた今、さらなる改革が求められています。とくに、芸術創作の教育研究の場として、大学教官が、自ら成果を上げるよう自覚することが重要です。伝統的に芸術大学は、多くの優秀な人材を出すことにより、トップとしての研究業績を示してきました。

現在、立派な施設環境が整備され、過去一〇〇有余年の歴史の中では最も充実しています。設備に加えて、教育研究の最高水準であり続けるためには、教官の質向上と自覚が不可欠です。これを実現できる制度が求められています。本来、制度の前に、我々が行動することが当然の義務であり、本学の将来のためだと、強く感じています。新しい文化の歴史を全学一致で築きたい、と願っています。

と対話する

座談会

グローバル社会と芸術文化創造

芸術表現にとって〈国際化〉とは何だろうか。
芸術の価値は、普遍的であるとともに、国家・個人・民族のアイデンティティも大きな意味を持つ。
国際的舞台で活躍し、内外の芸術教育にも見識をもつ、4人の教官が語る。

川俣正（美術学部教授）
島田文雄（美術学部助教授）
鈴木雅明（音楽学部助教授）
若杉弘（演奏芸術センター教授）

美術教育の国際化、音楽教育の国際化

司会　今日お集まりいただいた先生方は、それぞれの分野で国際的な高い評価を受けていらして、しかも海外での経験がたくさんおありになる。アーティストであり教育者である皆さんに、芸大と国際社会、個人の創作活動と国際社会の関係について、お話しいただければと思います。

鈴木雅明　西洋音楽を演奏する部門に関していえば、今まではずっとヨーロッパに学び習うことが最終目的になっていました。芸大で勉強した人は成績のいい人ほど、ヨーロッパに行ってしまう。芸大で、ヨーロッパのコンセルヴァトワールの予備軍を教育しているような状況がずっとありました。一方で、ヨーロッパから芸大に学びに来る人は、現状ではごく

特集 大学は世界

**芸術を通した国際交流には無限の可能性がある。
これまでも豊かな成果を実らせ、グローバル化のなかで今後もさらに期待される、
東京芸術大学の国際的活躍を紹介する。**

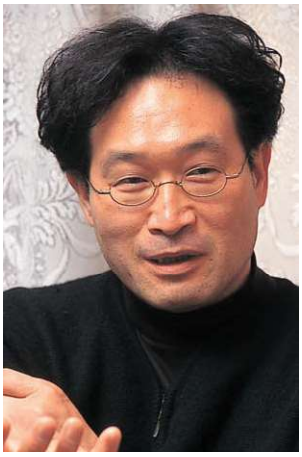
わずかです。今後もアジアからの留学生が増える可能性はあるでしょうが、欧米の人が日本に来て西洋音楽を学ぶという状況がこないかぎり、ほんとうの国際化とはいえないでしょう。

ただアメリカ人で日本で勉強したいという人がいても、制度やスカラシップの面で、日本人がヨーロッパに行くほどにはメリットが多くない。芸大と日本がさらに国際化して、留学生が増えていくには、個人的な教育レベルだけではなく西洋音楽を学ぶ社会的環境や、経済的なレベルも含めた全体的な価値が上がっていくことが必要だと思います。

川俣正　芸大がインターナショナルなレベルの大学になりうるには、留学生や提携校の数、大学システムの問題以前に、教官自体の国際化がまず必要だと思います。もちろん国際的な作家だからいい先生かどうかはわからない。あるいは、いい先生だから国際的なわけでもありませんが、通常外国の大学では、そこの大学で教えている教官の質で、学生が集まるわけです。芸大の教官のレベルを国際的にする以外にないと思います。

若杉弘　美術学部の担っている教育は、絵画、彫塑、塗り物と日本古来の芸術が進化し、発展を支えてきたものです。一方、西洋音楽の場合、外国で生まれ育くまれて明治以降に受容した芸術を扱っているので、どうしても、追いつき追い越せという気持ちがある。すると、どうしても海外から学生を受け入れるよりも、送り出すほうにウェイトがかかってしまう。

ただ忘れてはならないのは、音楽学部には邦楽科があります。これは日本の伝統音楽芸術で、海外にも習いたいという人がいる。東京芸術大学には、立派な先生方が集まっておられて、日本に来なければ流儀が教われない邦楽科があることをアピールしていくべきだと思いますね。



川俣　正
かわまた・ただし

美術学部先端芸術表現科教授・美術家
1953年北海道生まれ。東京芸術大学大学院修了。
77年より表現活動をはじめ、82年ベネツィア・ビエンナーレ、87年ドクメンタ8、97年ミュンスター彫刻プロジェクトなど、国内外の展覧会に多数参加。近年はプロジェクト〈ワーク・イン・プログレス〉を展開。01年には水戸芸術館で大規模な個展「川俣正　デイリーニュース」が開催された。

島田文雄　陶芸の場合、世界の中で日本は主導的な立場にあります。使う食器に多様性がある上に、焼き物好きの多くの人に支えられているからです。諸外国には焼き物を愛でるという気持ちは強くありませんので、外国の陶芸家が、一カ月なり二カ月、日本の窯元で過すと、ここは天国だと言います。信楽や瀬戸で焼き物を焼いた人たちが、アメリカに帰り「日本ではこうだった」と報告すると、留学を考えている人にはひとつのサジェスチョンになる。ですから陶芸科では、姉妹校提携している大学から短期派遣や招聘の要望が非常に多くて、交通整理しながら断っているような状況です。

鈴木　クラシック音楽は本来西洋に根ざしたものですが、価値が多様化し、グローバルなものだという認識が強くなってきています。特に私がやっている古楽は、十八世紀以前の楽器を再現して使い、その演奏法は二十世紀の半ばに出てきたものなので、日本人と他の国の人たちは、ほぼ一緒にスタートラインについた。

　しかも、十九世紀以来のヨーロッパの伝統とは異なる価値観を打ち出したいという共闘精神があるものですから、インターナショナルな絆が強いのです。世界のバロック・オーケストラに、十カ国以上の人が集まっているのは当たり前です。古楽の世界では、非常に不思議な国際化が進んでいるといえるでしょう。

川俣　美術の場合、作者の国籍や出身地を、表現の中にひきずることが多くあります。自分の育った文化を出さないかぎり、作家として表現のレベルに達しないと思い込んでいる。しかし、それを超えたときに、はじめて国籍や出身地と関係のない個人の表現レベルに達する。だからインターナショナル、国際化というのは、国を超えたところ、国が消えたところにあるのだと思います。

　小澤征爾さんが語っていたのですが、日本人が西洋音楽を指揮することに偏見などなく「小澤の音を聴きたい、指揮を見たい」ということで聴きにくるんですね。

鈴木　私の友達で「小澤征爾って日本人だったのか」って言った人がいます。小澤さんにかぎらず、武満徹とか若杉さんを、どこの国の人であるかを知らないのです。我々はヨーロッパ人と日本語で話すことがないですから国を意識することはありません。だから国際化という言葉自体がすでにおかしいと思うのです。

グローバリズムとアイデンティティ

島田　芸大に学びに来た先生たちのルートがありまして、五年前くらいから、トルコ、中国、韓国、アメリカでワークショップを毎年やっています。それを学生が各国十人くらいずつ合流して五十〜六十人で一緒に焼き物をやる。それぞれの国の先生たちが、自分の国のテクニックを表現しあいます。そこで見えてくるのは、韓国は韓国で独自の陶芸文化がある、トルコにもペルシャ陶器があるわけです。そういう独自の文化と技術を大事にしたほうがいいんじゃないか。

　ただ韓国の現状は、アメリカナイズされた先生たちが陶芸を教えているものですから、韓国の特色をもった教育がないのは非常に残念です。中国も、欧米からいろいろ吸収して、陶芸文化を再生させようとしています。景徳鎮をはじめとするすばらしい文化的土壌を、ヨーロッパやアメリカに発信することも必要なのではないでしょうか。

川俣　個々の地域性や文化的背景を、自国のアイデンティティを武器として紹介するのは少し危険だと思います。例えば、日本人、日本文化で言えばエキゾティズムやオリエンタリズムという括り方を簡単にされるわけです。ヨーロッパ中心主義みたいなものがまだどこかにある。

　だから日本人が西洋音楽に取り組むことにコンプレックスがあるとしたら、それはちょっと違うのではないでしょうか。西洋音楽のルーツが日本にはないと積極的に認めるべきだと思うのです。美術でも黒田清輝がヨーロッパから持ち帰った油画が、芸大で専攻できますが、「日本画のほうが日本文化を背景にしているからオリジナリティがある」という文化保存学的な捉え方もありますが、文化というのはいろいろなものがクロスしてその中で出てくるものです。だから国のアイデンティティというのを、どこまで純粋なものとして、把握できるのか疑問ですね。

鈴木　様式というのは畢竟個人のものだと思うのです。私がバッハを演奏するときには、バッハにもっともふさわしい演奏をしたいと思うわけです。日本人としてとか、芸大の教官としてとかは関係なく、自分の中でベストの状態をつくり出したい。ところが、振り返ってみればやはり日本人であることからは出ていない。この時代にこういう環境に生きている、歴史の流れからは出られないわけです。

　私のバッハの演奏を聴いて「日本人だから墨絵

の影響があるのではないか」という海外の批評家がいました。線的なポリフォニックなものが、墨絵と関係があるというのでしょうか。私は墨絵を深く鑑賞したわけでもないのに、ヨーロッパ人から見れば共通点が見えるかもしれない。日本人であることを否定はしないし、そのように振る舞おうともしていませんが、自分の価値観はどこかでヨーロッパ的なものと日本的なものが、混合しているというのでしょうか。

川俣　一方で、国家のルーツを断ち切られたディアスポラ（離散者たち）のもつアイデンティティの取り方には、マルチカルチャー的な部分があると思うのです。どこに自分の存在価値や存在理由があるかわからない彼らのアイデンティティが表現に出てきたとき、単一な整合性のあるアイデンティティ以上に、複雑な国の文化が絡み合って非常におもしろいものが出てくると思う。

若杉　音楽の中でも作曲という創作分野は、美術学部の先生方が目指して考えてらっしゃることに直結するのでしょう。ところが我々の指揮や演奏の仕事は再現芸術であって、楽聖と呼ばれるような偉大な作曲家がすでに呈示したメッセージを、響きに変えて、お客様に届ける仲介業者なのです。そのときには自分が日本人なんて全然意識していない。自分と作品・作家との対話であって、演奏するときにはすでに自分は国際人になっています。インターナショナルでグローバルであるべきだという考えは、再現芸術には、一切ありません。

　日本はヨーロッパから遠く離れた島国で、西洋音楽の受容から百何年しか経っていないのは、むしろ幸いなことなのです。各地の方言を観察し分析し、いいものと余計なものを区別できる見晴らしのいい観測所なのです。理想的な再現が可能な立場にいる。だから、日本で充分観測し、カテゴリーを分析した上で、目標をしぼって外国に行くのが有効だと思います。

芸大の歴史と、未来への展望

若杉　芸術大学が世界の中で求められていますが、この学校の成り立ちは東京美術学校と東京音楽学校が、第二次世界大戦後に統合されて、東京芸術大学と名乗ったために、二つの部門しかない。二十一世紀に総合芸術大学を目指していくには、外国の芸術大学にある演劇、舞踊、映像、舞台美術などの部門が不可欠でしょう。

　美術学部の先端芸術表現科のように、音楽学部にも新たに音楽環境創造科がこの四月に発足します。将来的には二つの学科が手を携えて第三学部に発展していくことによって、美術学部と音楽学部の架け橋になり、ひいては世界の中での東京芸術大学につながっていくのが望ましいと私は思うのです。

川俣　芸大で不思議なのは、美術学部の場合、素材で科ができいてるわけです。油画、日本画、陶芸、鋳金、彫刻……、それは技術ですよね。技術の方法が違うだけで、絵を描くあるいは立体をつくるというベーシックなところは同じだと思います。先端芸術表現科ができて演劇や映像など、今まで芸大になかったものを求めて学生が入ってくる。そのような状況で、また演劇や映像が単なるメディアの違いだけで捉えられても、何も変わっていかないのではないか。技術やテクニックで科を分けるのは、現在の美術を見渡すとすごく変な感じがします。

若杉　現在でも美術学部と音楽学部で単位の交換ができます。架け橋になる先端芸術表現科や音楽環境創造科に目を向ければ、学生たちの交流も進み、自分の専門の周辺にある文化にたくさん出会えるはずなのですよ。

島田　工芸はテクニックが非常に必要ですし、特化させることも大事なのです。ただ学生の立場からすると、陶彫をやるためには彫刻も勉強したいし、陶壁ですと建築やデザインをかじってみたいわけです。有効、複合的なテクニックを取り入れながら創作できるシステムができたら理想的だと思いますね。

川俣　ただ現実には、油画科に入ると彫刻や工芸には行けない。その大きなネックはテクニックなのです。技術の習得というのは「特化」したものですから、他の科には容易に行けないという事実はあると思います。

鈴木　インターメディア的な発想は重要だと思うのです。ただ我々の活動は、やはり非常に特化したところがスタート地点なのであって、逆の発想で教育しても、総合芸術大学のような構想には行き着かない。我々の活動は、芸術とくくる必要はなくて、あくまでも職人的にプロフェッショナルに分野ごとに「特化」している。

川俣　専門の部分と教養の部分を分けて考える。

島田文雄
しまだ・ふみお
美術学部工芸科助教授　陶芸家
1948年栃木県生まれ。東京芸術大学大学院修了。
96年より、ワシントン州立タコマ・コミュニティ・カレッジ、トルコ国立アナドール大学、中央工芸美術学院陶磁系（北京）など、海外の教育機関との間で合同講座や実技指導・講演を積極的に行う。実技指導書も多数刊行。

鈴木雅明
すずき・まさあき

音楽学部器楽科助教授　チェンバロ・オルガン奏者
1954年兵庫県生まれ。東京芸術大学大学院オルガン科で学んだのち、スウェーリンク音楽院（アムステルダム）を卒業。ブリュージュ国際チェンバロ・コンクール、同オルガン・コンクールに入賞。90年からオリジナル楽器アンサンブルと合唱団〈バッハ・コレギウム・ジャパン〉を結成。海外公演も多い。

ファウンデーションというのはまさに教養を指しています。昔だとかなり自分で意識して芸大に入ってくる学生が多かったけれど、今は特化する前の段階で入ってくる。特に先端の場合は、いろんなものに興味をもっている学生がほとんどです。でも芸大の特徴は、まさに「特化」していることです。自分の考えが定まる前の段階で、メディアを選ばなければいけない。そんなジレンマが学生にはあると思います。

鈴木　音楽では、「特化」はもっと早く起こるべきだと思います。大学に入った時点で、自分は何をしたいかわからないという状況、やりたいことを明確に意識できないというのは問題です。

若杉　私の持論なのですが、一九四五年以降アメリカの文化政策による六・三・三制という教育制度が問題で、昔は十五歳で元服ですが、今の成人式は二十歳です。十五歳で元服の時代には、その歳で大人の自覚があったはずですが、今の若者は十八歳では自分の進路を決められない。成人前ですから。

鈴木　例えばピアノは十八歳からやりたいと思っても、ピアニストになるのは難しいという状況はあるでしょう。確かに私も十八歳で芸大に入ったときと今とは全然違うことをやっていますから、入学時点にすべての方針が決まるとは思っていません。ただ、芸大の場合には、自分の目指す分野が特化されているというメリットは、計り知れないでしょう。

若杉　海外の音楽演奏の教育では、どの作品をどう演奏したいか、作品をいかに豊かに感じるかという欲求を育てることに重点がおかれています。「この曲をこう演奏したい。それにはこの技術が必要だ」と。心の欲求から探しあてた指遣いは、二度と揺るがないですから。

　ただ、戦後の日本では、あまりにも英才教育を重んじすぎたと思います。「技術がパーフェクトであれば、表現したいものが見つかったときに、完璧に演奏できるはずだ」とメカニズムが優先してしまった。それは「特化」ではないと思います。

鈴木　確かにそうです。私が言う「特化」は、決して技術的なことではなくてもっと感覚的なことなのです。例えば、この和声は不協和音でこういうふうに弾くべきだというフィーリングは、ある年齢より後には絶対身につけることができません。子供の時から育むべき感覚ですね。

　ただ「じゃあ子供の時から和声をやらせるべきだ」ということになると、また技術に陥ってしまう。特化した要素を非常にバランスよく訓練しながら、ファンダメンタルな部分だけを取り出して育てるのは難しいことです。

芸大の国際性

島田　今日卒業制作の講評で「サガファイアー」というアメリカ特有の焼き方で、初めて作品が出てきたんです。登り窯を焼くときに「匣（さや）」という灰がかぶらないようにプロテクトする容器があるのですが、アメリカでは逆に、匣の中におがくずやバナナの皮や針金で巻いた石を入れて、複雑な炎の表現を定着させる。楽焼でも、アメリカには日本とはまた違う「アメリカン楽」と呼ばれるものもあります。異質なテクニックを知るとそれに基づいた表現方法を考えられる上に、作品にも多様性がもてるようになる。学生にとっては、大事なことです。

川俣　蛸壺的に追求していく方向と、多様な分野を吸収していく方向と、つねにジレンマがあります。専門化して穴を掘り下げていくと、前が見えなくなる。前だけを見ていろんなものを吸収しても、突き詰めていけない。

　両方をできる唯一の方法は、二つの方向性を行き来すればいいと思います。表現者にとってフットワークはとても重要で、いろんなものを吸収しながら、なおかつ特化した部分を突き詰めていく。大学がそのような、フットワークの良いインターヴァルをかなり意識してやっていくとそれも可能になるでしょう。

島田　陶芸でも、アメリカのスタイルを学んだ教官が、モダン・アートや前衛的な表現を基軸に教えている芸術大学が日本にあります。ところが芸大は、まず伝統的なものを教えようということで、轆轤を中心に教えています。外国で茶碗を作っても一介の職人としてしか見られず、ステータスは上がりません。したがって、世界的な陶芸の世界ではアートのほうが評価され、アーティストにもなれる可能性が高い。ただ、職人的なものを中心に教える芸大を、そのことによって一目置いている人たちがいることもまた事実です。

川俣　芸大の知名度というのは、芸大を出た学生が作家になり表現者になって、はじめて出てくるものだと思います。なぜＭＩＴとかハーヴァードが評価されているかというと、教官や卒業生がいい仕事をしているからです。芸大の場合も、有名なアーティストや、社会的なステータスをもった人がここか

ら出ていったということが、唯一大きい価値だと思うんですね。

教官・学生の意識改革

若杉　ピアニストでもヴァイオリニストでも指揮者でも、文学、絵画、演劇、舞踊、身体表現、映像などの栄養をできるだけ吸い上げた人が、感性を育み、専門分野に役立てることができ、そして交流もできる。我が国唯一の国立芸術大学である本校が、そのあらゆる芸術分野の、だれもが鍵を開ければ入れる状態になっている、開かれた大学になるべきだと思いますね。

川俣　それを芸大に求めるのか、芸大以外の場所に求めるのか。教養的なものは、他の大学でも習えますし、それに「特化」した大学はいくらでもあるわけです。私は芸大は大学院だけでもいいと思っています。なぜかというと、学部のファウンデーション的な部分は、海外を含めて「特化」した大学で学んで、芸大に帰ってきてから蛸壺的な部分に入っていけばいい。語学や社会学、経済や法律、それに医学も美術には必要です。ただそれらすべてを芸大が請け負うべきなのか、あるいはもっと先鋭的にひとつの蛸壺をどんどん深めていくべきなのか。ユニバーシティとして芸大を考えるか、あるいはカレッジとして「特化」した組織として考えるのかは大きな分岐点ではないでしょうか。

鈴木　それは両方あると思います。組織としての芸大というのを、この日本社会の中でどう位置づけるかということ。広い意味で、音楽教育、美術教育として、表現の世界で中核となる次の世代を育てることに重心を置く価値観から言うのであれば、大学院だけでいいというのはある意味で賛成です。しかし十八歳から芸術教育を始めてもすでに遅いから、高校のみならず中学、小学校、幼稚園からやるべきだという考え方もありうるでしょう。

英才教育をほどこすのが目的ではなく、我々が今、次の世代に伝えるべき価値観が重要だと思います。何を美しいと感じるかという価値観を獲得するのは、十八歳になってからでは遅いのではないか。今どちらに進むべきなのかが非常に難しい問題です。

島田　今、工芸の一年の担任をやっていますが、休学して外国に行きたい、という学生が何人か出てきたんです。私としては「大いに休学しなさい、八年間で卒業してもいいんじゃないか」と思っています。この日本で社会を学ぶよりも、旅をして苦労しながら、外国に行って若いときに感性を磨くのは、すばらしいことです。いろんな国の芝居を見たり、音楽を聴いたり、酒飲んだり、経験が豊富にできるわけです。旅によってその人の価値観や感覚が磨かれるのではないでしょうか。

若杉　それが理想的かもしれないですけど、「隣の柿は甘そうに見える」とも言います。芸大ですばらしい担当教官のもとに指導を受けていても「外国のほうがもっといいのでは」という考えで安易に留学するのはいけません。芸大の先生のもっているものをしゃぶり取るぐらいに吸収して、これだけのものを獲得したから海外で極めたいというのが本道です。

鈴木　音楽教育においては、レッスンはとても重要なんですが、そこから得られることはほんとうにわずかなんです。学生もきちんとレッスンしてほしいという人が多いような気がします。学生自身が演奏することもレッスンに劣らず重要ですから、「自分の本番を優先しなさい」と言うのですが、そういう価値観はあまり音楽の中では通用しない。だからもっと自由に、国際までいかなくとも、いろんなところに行って体験をたくさん積めばいいのにと思いますね。

若杉　教室で教えられることと、現場で覚えることは、それぞれ違いますからね。教室で一対一の時間が充分あったにしても、私が演奏の練習をオーケストラとしている場に学生が足を運んでくれるのはうれしい。そこで得るのは教室で得られないものですから。今私の任務は、芸大という金魚鉢をたたき割って、外で何が起こっているか、新しい空気や酸素を教室に運んでくることだと思っています。

学生にも、「塀の中の価値観や上下関係に閉じこもらずに、外の空気を吸いに出ようよ」と言っています。その延長線で海外に行き、いろいろな人と知り合って、触発される体験があると思うのです。学生たち、がんばれ！

司会　長い時間ありがとうございました。

（一月二四日、東京芸術大学赤レンガ談話室。司会「芸大通信」編集委員会）

若杉　弘
わかすぎ・ひろし
演奏芸術センター教授　指揮者
1935年東京都生まれ。東京芸術大学卒業。卒業と同時にNHK交響楽団指揮研究員となり、ケルン放送交響楽団首席指揮者、ライン・ドイツ・オペラ総監督、ドレスデン国立歌劇場およびシュターツカペレ常任指揮者、チューリッヒ・トーンハレ協会芸術総監督・同管弦楽団首席指揮者、東京交響楽団音楽監督・首席指揮者を経て、現在NHK交響楽団正指揮者、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール芸術監督を務める。日本芸術院会員。

インタビュー

私たちの国際交流

教官・学生はどのような交流をしているのか。
人と人が出会い、創造する場と機会が生まれる。

宮田亮平

ソウル大学校 美術大学との交流展

大学美術館で行われた交流展のオープニングでは、ソウル大学校の学生たちが手作りのキムチで芸大生をもてなした

ソウル大学校と東京芸術大学は姉妹校の提携を結んで十二年になります。最初の数年間は、国際会議、講演会を重ねるなど、教官の交流がさかんでしたが、一九九六年にソウル大学校で学生版画交流展とワークショップ、共同制作が行われ、翌年に東京で同様の交流が行われてから、学生レベルでも本格化しました。彫刻部門での交流（九八年ソウル、九九年東京）を経て、この二年は、工芸科がうけもち、工芸のもつ技術や素材についての実体験や意見交換の場がもたれました。

ソウル大学校には、工芸では金工と陶芸の科があります。二〇〇〇年は、芸大工芸科の七講座のうち金工三講座（彫金・鍛金・鋳金）の相互交流、二〇〇一年は漆芸、陶芸、染織、木工の学生と、ソウル大学校の陶芸の学生の交流が行われました。昨年は、十月に、ソウルに教官二名、大学院生四名を派遣し、セミナーとワークショップを開催。十一月には韓国から教官2名、彫刻専攻大学院生四名を招いて、特別講義、シンポジウム、工芸科交流展を開催しました。いずれの交流も一週間におよび、制作の話のみならず、未来に向けた文化の立役者として、多くの会話ができたように思われます。

今回の交流で最も印象に残っているのは、大学美術館での交流展のオープニングのとき、ソウル大学校の学生たちがその場でキムチを作ってくれたことです。嬉しさと、あまりの辛さで涙が出てきました。作品だけでなく文化を伝えようという気持ちが、若い世代には自然に身についているようです。芸大側も、留学生が率先して通訳を買って出ますし、学生たちは必ずハングル語を一言入れて挨拶していました。

このような活動は、意義を理解していただいている、芸術研究振興財団、野村国際文化財団からの援助なくしては成り立ちません。

今年はデザイン科の交流展を行う予定ですが、建築科や、現代美術を扱う先端表現芸術科、それに保存分野での交流もとても重要でしょう。

交流の主役はあくまでも学生ですが、教官にも、知識や技術を授けるだけではなく、次の世代が活躍できるための土台作りという大きな務めがあります。

（みやた・りょうへい／美術学部長・美術学部工芸科教授）

古嶋春子（笠間）

ヨーロッパ・ピアノ・フォーラム2001

初参加の今回は「日本の現代ピアノ音楽」と題して講議・演奏を行った

ヨーロッパ・ピアノ・フォーラムは、ベルリン芸術大学で隔年で行われ今回で三回目になります。過去二回はヨーロッパの大学だけで行われていましたが、今回はそれ以外の国も招きたいということで、ジュリアード音楽院（ニューヨーク）とチャイコフスキー音楽学校（モスクワ）、ルービン・アカデミー（テルアビブ）、そして日本の東京芸術大学が参加しました。

このフォーラムでは、学生は自国の作品を含むミニリサイタルを、教官は公開講座、レクチャー、レッスンのいずれかを行うことになっています。ピアノ科内で相談した上で、講義と演奏を交えながら日本の現代作曲家を紹介しようと考えました。

芸大からは大学院生が一名同行。講義の当日は、芸大の卒業生で、現在ベルリン芸術大学に留学している学生二名も協力し演奏してくれました。

「日本の現代ピアノ音楽」と題した講義・演奏では、最初に日本に洋楽が入ってきてからどのように定着していったか、芸大は日本で唯一の国立芸術大学で日本の伝統音楽の育成にも力を入れていることなどを説明。そこで、日本人ではじめてベルリンに留学した山田耕筰の「からたちの花」（山田自身のピアノ編曲）と、L・ディートリッヒの「さくら」、別宮貞雄の「五木の子守唄」の編曲を演奏してもらいました。山田耕筰は「メンデルスゾーンのようだ」と評判でした。

戦後日本の音楽界への欧米からの影響、ヨーロッパでも有名な武満徹に触れたあと、現代の日本を代表する作曲家である野平一郎・三善晃・野田暉行・石井真木の四人の作品を紹介しました。野田・石井の作品は私が弾きましたが、日本の前衛的な作品を知っていただけたと思います。

私が留学していたころは、ベルリンはドイツ音楽の本拠地という印象が強かったのですが、現在では教授の顔ぶれもロシア、イギリス、フランスと多国籍的状況です。演奏した学生にも、東洋人が多く見受けられました。ただ、学生に自国作品の演奏が義務づけられているように、お国柄への配慮もなさ

多田羅迪夫

国立ウィーン音楽演劇大学との交流オペラ公演

芸大オペラ科では、ウィーン国立音楽演劇大学との交流オペラとしてモーツァルト作曲のオペラ「コシ・ファン・トゥッテ」を、一九九九年（芸大公演）と二〇〇〇年（ウィーン公演）に行ってきました。

九九年の芸大公演ではウィーンから三名のオペラ科大学院学生を招き、佐藤功太郎教官の指揮、芸大学生オーケストラの演奏に、本学大学院生との混成キャストによる演奏会形式での上演を実現することができました。

ウィーンでの公演には、芸大から三名の大学院学生が招かれて、約十日間という短期間の練習にもかかわらず、ウィーン側の演出プランに応えてすばらしい演唱をみせ、大成功を収めました。長所と短所をお互いに知ることができたという成果には計り知れないものがあります。イタリア語というハンディは同じなのにもかかわらず、芸大生はより深く研究し、安定度をみせた点で、ウィーンの学生に刺激を与えたことでしょう。芸大生のレベルの高さを認識できたいい機会にもなりました。一方で、ウィーンの学生の、表現の振幅の大きさや感情表現、立ち居振る舞いの面では、日本人とは生活習慣の違いが際立ちました。

今回の新しい企画では、C・モンテヴェルディと同時代の作曲家フランチェスコ・カヴァッリのバロック・オペラ「ラ・カリスト」を古楽科との共同作業で行おうというものです。

ウィーンではこの一月に公演を行ったのですが、芸大は諸般の事情により、ウィーン公演に大学院学生を派遣することができませんでした。しかし、芸大での公演には、ウィーンから演出家・出演者の一部を招聘するとともに、ウィーンで制作したバロック・オーケストラ用のオーケストラパート譜や舞台衣装を、費用折半で使用する予定です。

芸大公演は二〇〇三年三月中旬を予定していますが、「ラ・カリスト」の上演としても日本初演という有意義なものになるはずです。

「コシ・ファン・トゥッテ」「ラ・カリスト」に引き続き、ウィーン国立音楽演劇大学との交流オペラ公演の継続は、豊かな実りをもたらせてくれることでしょう。

（たたら・みちお／音楽学部声楽科教授）

奏楽堂で行われた交流オペラ公演「コシ・ファン・トゥッテ」

蘇伯民

中国から派遣され壁画保存を研究

敦煌研究院は、有名な莫高窟をはじめとする敦煌遺跡の管理機関です。研究院は五十年以上の歴史があり、そのなかの保存研究所は保存修復に関して、中国でも大変重要な組織のひとつです。

研究所には三十二名の研究者がいます。日本の大学教授に相当する研究員は三名、助教授に相当する副研究員は五名、その下の助理研究員は十名いますが、私は副研究員です。

中国では、一九八〇年代後半から科学的な方法による保存研究が本格的に始まりました。その背景としては、中国政府が文化財保存に力を入れ始めるとともに外国との交流も深まり、それを基盤として発展していったわけです。外国の重要な協力機関として東京文化財研究所と、アメリカのゲティ文化財研究所があります。日本からの支援協力には平山郁夫現学長の大きな支援がありました。芸大へは、毎年のように敦煌研究院から研究員が派遣され、保存科学だけではなく、美術史の研究者も、ここで学んだ知識を大いに役立てています。

私は西安市と敦煌の中間、シルクロード上にある蘭州の出身です。蘭州大学では化学を学んでいましたが、敦煌研究院で公開募集があったとき、自分の専門分野が生かせるのではないかと思って応募し採用されました。壁画に使われている顔料の成分分析、保存のための湿度の測定など、貴重な壁画を後世に残すためには、化学的知識はとても重要なのです。

私は二〇〇〇年六月に来日し、今年の五月に中国に戻りますが、この間、芸大の教官・学生の方々と共同で研究して、とても充実した時間をすごせました。しかも、芸大には優れた実験技術と先端的な分析機器があり、東京には世界中の文献が集まっています。芸大や東京文化財研究所は、日本の資料だけではなく、欧米の文献も充実しているので、大いに活用しました。

また、日本で獲られた最も重要なことには、「どのように保存すべきか」という保存の理念があります。技術や情報の蓄積だけではなく、日本そして芸大は、確固とした理念をもって、文化財保存の道を進んでいます。

（す・ぼうみん／大学院保存科学研究室客室研究員）

れています。

距離と時間の制約はありますが、東京の芸大でも、いずれこのようなフォーラムが開けたらなによりです。

（こじま・はるこ／音楽学部器楽科教授）

ジェーン・アラシェフスカ

日本の伝統音楽を調査するためイギリスから留学

私は、イングランドの北東部、ヨークシャー州ハルの出身です。子供時代、ハルでは外国の文化と出会う機会はあまりありませんでしたが、第二次世界大戦の時に移民して来た祖父母をとおしてポーランドの言葉と文化に接していました。祖父母のポーランド語を聞いて、私はハルという貧しい港町（雨が降り止まず、太陽はめったに顔をのぞかせない）の外の世界があることに気づきました。一七歳の時に、ギリシアのある村の修道院に滞在するまでは、音楽家になろうと決めていたのですが、その町で、初めてバッハやベートーヴェンなどの西洋のクラシックとは違う音楽を聴き、以後、異文化の音楽を研究しようと決心しました。

ケンブリッジ大学には、民族音楽学専攻がなかったので、音楽学を専攻しました。最終学年時、日本の音楽と文化についての講義があり、日本へ行ってみたいと思うようになりました。三年間、JETプログラム（語学指導等を行う外国青年招致事業）により、茨城県のとても小さな町ですごしました。一九九七年にイングランドに帰国して、SOAS（ロンドン大学オリエント・アフリカ研究学部）で民族音楽学の修士課程に入学し、二〇〇〇年に二年間の文部科学省の国費研究留学生に採用されました。修士課程の最終学年に、SOASに八丈島から三人の太鼓奏者が来学し、大英博物館見学の案内を依頼されました。国費留学生として来日した時、太鼓音楽を研究するため五つの伝統を調査しようとリストアップしたのですが、八丈島の音楽が大変興味深かったため、ほとんどの時間をこの島の伝統の集中的調査に当てることにしました。

日本の大学を経験したのは、芸大が始めてでしたが、SOASとはシステムが違っています。まず、日本では自宅よりも、大学で研究することを求められています。このため私のセミナーの学生は、定期的に集まってアイデアを討議し、情報を分かち合います。ところが、イギリスの大学院では、講義（修士課程）や個人指導（博士課程）のためでなければ、大学に来ることは求められません。SOASのほとんどの大学院学生は、郊外に住んでおり、あまり大学には行きません。その代わり、インターネットでグループを組みアイデアを討議し、電子メールで助けを提供しています。これは孤独な勉強のしかたです。

私は、イギリス式で育ったので自宅で研究することに慣れていますが、芸大に行き他の学生に会えるのは好きです。日本語で分からないことがあっても、いつでも誰かに訊くことができます。SOASに在学する留学生が英語で同様な手助けを得るのは、難しいことだろうと思います。

さらに、芸大では博士課程の学生はティーチング・アシスタントとして採用されています。このシステムは、しばしば日本語で論文を書かなければならない留学生には、とても有益です。SOASでは、助力を求めて関係教官に会わなければなりません。つまり、わざわざ遠い大学に行って、長時間廊下で座って待ったあげく、いつも助力を得られるとは限らないことを意味しているのです。

とはいえ、私の研究課題の重要な部分は、フィールドワークにあります。場所が東京から遠いため、この重要な調査を行うことは、通学に重きをおく日本のシステムとは相いれないことに気づきました。指導教官の支持があるとはいえ、大学の全ての部署で理解が得られることではないので、八丈島に行くときには、いつもずる休みをしているような気がしています。留学生が、東京を離れて調査活動を行うことは重要なことですから、大学はこの事情をもっと考慮して良いのではないか、と思っています。

（Jane Alaszewski／大学院音楽研究科国費研究留学生）

姉妹校・大学間交流協定締結校一覧

相手方学校名	国名	締結年月日	対象学部	備考
中央美術学院	中華人民共和国	1989年 4月 1日	美術学部	
ミュンヘン音楽大学	ドイツ連邦共和国	1989年 7月31日	音楽学部	
シュトゥットガルト芸術大学	ドイツ連邦共和国	1989年 7月31日	音楽学部	
ソウル大学校美術大学	大韓民国	1989年 7月31日	美術学部	
シベリウス音楽大学	フィンランド	1992年12月10日	音楽学部	
中央音楽学院	中華人民共和国	1993年 4月 1日	音楽学部	
ウィーン音楽演劇大学	オーストリア共和国	1996年 5月27日	音楽学部	
パリ国立高等音楽舞踊院	フランス	1997年11月10日	音楽学部	
英国王立音楽院	イギリス	1998年 5月18日	音楽学部	
清華大学美術学院	中華人民共和国	2000年11月 7日	美術学部	旧中央工芸美術学院。学部間交流
王立メルボルン工科大学	オーストラリア	2001年 1月31日	美術学部	美術、デザイン＆コミュニケーション学部との協定
ソウル大学校音楽大学	韓国	2001年 4月24日	音楽学部	
王立北部音楽院	イギリス	2001年10月12日	音楽学部	
韓国芸術総合学校	韓国	2001年10月29日	音楽学部	学部間交流

NEWS 2001.10～3

交流

◆芸術国際交流協定の締結

○英国王立北部音楽院との締結

十月十二日、澤音楽学部助教授等が訪英し、王立北部音楽院（ロイヤル・ノーザン・カレッジ・オブ・ミュージック）との大学間国際交流協定書が取り交わされた。

同音楽院は、本年で創立百六年を迎える英国にある四つの王立音楽院の一つであり、作曲・現代音楽科をはじめ六科で構成されている。

○韓国芸術総合学校音楽院との締結

十月二十九日、高橋音楽学部長、柘植音楽学部教授等が訪韓し、韓国芸術総合学校音楽院において学部間国際交流協定の調印式が行われた。

同音楽院は、芸術家を育成するための実技専門の教育機関として、一九九三年に開校された韓国の新しい国立芸術学校（大学）で、音楽院、演劇院などの六つの学院から構成されている。

両校との調印により、本学の交流協定締結校（大学姉妹校）は、八ヶ国十四大学となった。

◆吹奏楽を楽しむ―御徒町中学校生徒と芸大生による奏楽堂演奏会の開催―

音楽学部では、これまでも教育委員会等からの依頼により、中学校や高等学校における音楽活動を支援してきたが、今年度、大学等地域開放特別事業の一環として、十二月八日に台東区立御徒町中学校生徒・本学学生合同オーケストラによる演奏会「吹奏楽を楽しむ」を、奏楽堂で開催した。

この演奏会は、台東区教育委員会の協力をえて、十月下旬から六回にわたり、同中学校の吹奏楽部員に杉木峯夫助教授と学生が実指導を行ってきた成果を披露するもので、約八五〇名の入場者があった。

◆平成十四年度公開講座概要の発表

平成十四年度公開講座実施計画がまとめられ、美術学部関係十二講座、音楽学部関係七講座の計十九講座が夏期を中心に開講する。

募集要項の配布は五月十日から。受付期間は六月五日から十四日まで。ただし、四月二十日から開講する「陶芸中級(手びねり)」「陶芸上級（ロクロ）」の受付期間は、三月二十日から二十七日までとなっている。

詳しくは、大学ホームページのトピック「公開講座」、または、担当係まで照会ください。

担当係　総務課企画調査係　03-5685-7508

大学ホームページ　http://www.geidai.ac.jp

受賞

◆本学関係者が文化勲章などをあいついで受賞

平成十三年度の文化勲章、文化功労者、秋の叙勲において、本学関係者では、次の方々が選ばれた。

○文化勲章　淀井敏夫名誉教授（彫刻）

○文化功労者　稗田一穂名誉教授（日本画）

○秋の叙勲　勲四等宝冠章　瀬山詠子名誉教授（声楽）

運営

◆取手校地に「メディア教育棟（第Ⅰ期）」が竣工

十月三十日に、取手校地（茨城県取手市）の美術学部メディア教育棟（第Ⅰ期）が竣工した。

この建物は、鉄筋コンクリート地上五階建て、延べ床面積三五二〇㎡。取手校地事務室、合同教官室、講義室、身体プロジェクトルーム、音楽収録室、工作室、上演設備のあるピロティ、共同ゼミ室などの他、附属図書館分室があり、美術学部先端芸術表現科ばかりでなく、四月新設予定の音楽学部音楽環境創造科との有機的な利用が予定されている。

なお、第Ⅱ期工事分（延べ床面積一九八五㎡）は、三月末に竣工予定である。

◆新学長に平山郁夫名誉教授が就任

十一月八日に、任期満了に伴う学長選挙が行われ、平山郁夫名誉教授が新学長に選出された。

平山学長は、平成元年十二月から六年間、学長を務めており、再度の学長就任は国立大学で初。任期は、十二月二一日から四年間。

また、学長交代に伴い、企画担当副学長として野田暉行音楽学部教授、教学担当副学長として益子義弘美術学部教授がそれぞれ就任した。任期は、二月十六日から二年間。

◆平成十三年度第二回運営諮問会議を開催

十二月三日に今年度第二回目（通算四回目）の運営諮問会議が開催された。

はじめに、澄川学長から挨拶と大学の運営状況等についての説明の後、鳥居副議長の進行により、十月四日に答申された本学の将来構想である「新学部等構想報告書」を中心に審議が行われた。各委員から、今後より一層柔軟な運営が可能となれば、任期制拡大などにより国内外から積極的に優れた教官を確保することや、プロジェクト等による新しい試みの導入等について、示唆に富む活発な意見が出された。

なお、会議に先立ち、広報委員会で作成された大学紹介ビデオCD及び取手校地に竣工した「メディア教育棟」の紹介が行われた。

◆音楽学部新学科「音楽環境創造科」の設置

本学は、平成十四年四月、取手校地に、二十一世紀の新たな音楽芸術と、それに相応しい音楽環境・文化環境の発展と創造に資する人材育成を目指す音楽学部の新学科、「音楽環境創造科」を設置する。

この学科の設置は、文部科学省令及び平成十四年度予算の成立により確定するため、願書受付は四月二日から四日、入学試験は四月十一日から十八日まで行い、最終合格者を二十日に発表することとしている。

入学試験及び新学科についての詳細は、大学ホームページの「大学入試・入学案内」に掲載されている。

東京美術学校1912年

青春の「自画像」——情熱と焦燥

佐藤道信
日本近代美術史。主要著書『〈日本美術〉誕生ー近代日本の「ことば」と戦略』『明治国家と近代美術ー美の政治学』

青春期に人はなぜこんなに悩むのだろう。手をのばしても、つかめない。愛したいのに、愛されない。伝えたいのに、伝えられない。何かをしなくちゃいけないのに、何を、どうすればいいのかわからない。激しいあせりと、もどかしさ。気持ちが強いぶん、拒絶感も強い。はね返そうと、グレてみても、キレてみても、答えは出てこない。でもいちばんわからないのは、じつは自分。自分はいったい、何者なのか……。それを求めて、もがきにもがいた青春。大正期とは、ちょうどそんな時代だった。

だから大正期は、「自画像」の時代でもあった。岸田劉生や中村彝、萬鉄五郎など、自画像の秀作が数多く描かれている。そして本学には、じつは自画像の一大コレクションがある。西洋画科（現在の油画科）が一九〇三年（明治三十六年）から、卒業制作として自画像を提出させたからである。だれの発案で、なぜ始めたのかは、よくわからないらしい。が、いまでは、だれかの個展のときには、最初期の作品として必ず出品される、貴重なコレクションだ。その中から、図版には一九一〇年代の二点と、その前後の二点をご紹介した。

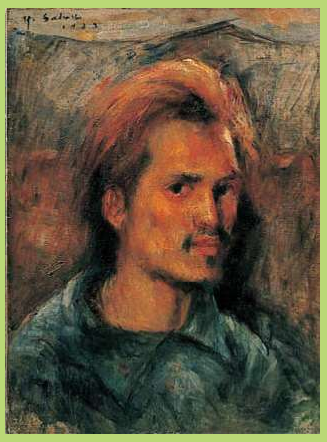
黒田清輝が教室に入ってくると、プイと出ていってしまった青木繁。福田たねとの熱愛、放浪生活の末の早逝。昂然としてギョロリとした目つきの中に、情動と焦燥が見てとれる。萬鉄五郎は、フォービスムで知られる。が、後期印象派風に描かれたこの自画像には、木村荘八が評した「何となく臆したる差し控えた物腰」の方が、ピッタリだ。シャレてすました小出楢重は、独特のマチエールはそのままに、やがて強い生活感を描き出す。俳優のような佐伯祐三は、パリに留学するが、鋭敏さゆえにやがて精神を病む。

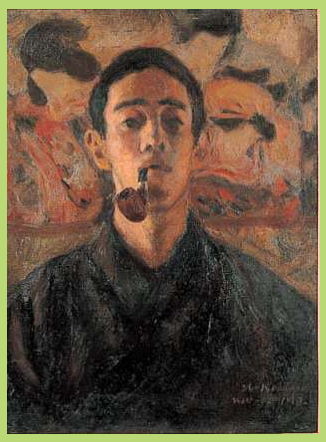
自分を描くことは、こわい。すべてが表われる。内省であれ虚勢であれ、自信であれ不安であれ。でもすぐれた自画像は、すべてをさらけ出すから、共感もよぶ。美術と国家を論じた明治に対して、大正期は、個としての美術を追い求めた時代だった。若い画家たちは、「生」と「自己」と「表現」を論じ、激しく燃焼して生きた。

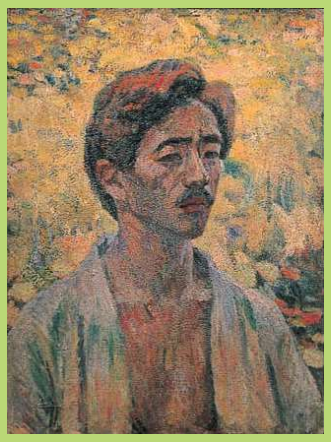
青木繁「自画像」1904年

彼らの生涯は、一様に短い。青木二十八歳、佐伯三十歳、萬四十一歳、小出四十四歳。美校以外の作家でも、関根正二二十歳、村山槐多二十三歳、中村彝三十七歳、岸田劉生三十八歳。そのなかに、恋愛、放浪、貧乏、結核、神経や精神の変調などが、ぎっしりつまっていた。だれもが通る青春。そしてその青春そのままに、一回きりの短い人生を、激しくかけぬけた彼ら。その切ないほどの純粋さが、見る人の心をゆさぶる。じっさい、よくドラマになる貧しく純粋な画学生のイメージには、大正期の作家のイメージがかなりかぶっている。私たちもそこに、ドラマを見たがっているのかもしれない。でもそれはそれで、いいのではないか。それも芸術機能のひとつなのだから。

（さとう　どうしん／美術学部芸術学科助教授）


佐伯祐三「自画像」1923年


小出楢重「自画像」1914年


萬鉄五郎「自画像」1912年

タイムカプセルに乗っ

東京音楽学校1912年

わが国オーケストラの父、ユンケル

瀧井敬子

音楽学（ドイツ・ロマン派、および日本洋楽草創期の研究）。主要論文「幸田露伴と音楽、そして妹の延」「東西音楽の接点ー音楽におけるジャポニスムの一断面」

上：シュトルベルクにあるユンケルの生家。ユンケルの孫／岩倉具一氏所蔵
左：生家前の広場は、「アウグスト・ユンケル・プラッツ」と命名されている。岩倉具一氏所蔵　シュトルベルクの町の地図は、下記のサイトに掲載されている。
http://www.stolberg.de

一九一二年（明治四十五年）における指揮を最後に御雇外国人アウグスト・ユンケルが東京音楽学校を去った。彼は一八九九年に採用されて以来、八面六臂の活躍で、音楽学校にいわゆるフル・オーケストラを初めて組織して、シューベルトの《未完成》交響曲をはじめとする管弦楽曲だけでなく、ケルビーニの《レクイエム》やブラームスの《ドイツ・レクイエム》など、管弦楽つき大合唱曲の初演を手がけるまでに育て上げた。その功績は大いに評価されてしかるべきであろう。

ユンケルは一八六八年、北西ドイツ、アーヘン近くの古い町シュトルベルクに生まれた。ケルン音楽院を首席で卒業。在学中、選ばれてブラームスの前でヴァイオリン演奏を披露したほど優秀な学生であった。卒業後は当代随一のヴァイオリニストのヨアヒムに師事。ベルリン・フィルに入団後は巨匠ハンス・フォン・ビューローに推挙され、コンサートマスターにまでなった。だが一カ所になかなか落ち着かない性格だったようで、ケルン、ボストン、シカゴの交響楽団を首席奏者として転々とした。ドイツから楽員を集めるよう頼まれて、シカゴからドイツへスカウトに出かけ、その帰路の船中でドヴォルジャークと会って、親しく合奏をしたことはユンケルの誇らしい思い出の一つになっている。いずれにせよ、彼は音楽家として一流だったのだ。だが、日本のジャーナリズムは彼の能力を正しく理解できず、彼の採用の際にも、また契約更新の際にも嫌がらせ記事を書いていた。

そもそも彼を東京音楽学校に推挙したのは、夏目漱石の随筆でも有名なケーベル博士である。ケーベルは東京帝大の哲学教授であったが、若いときはチャイコフスキーやN・ルビンシテインに学んでモスクワ音楽院を卒業、優れたピアニストでもあった。横浜の楽器商「デーリング商会」で働きながら、慈善演奏会でヴァイオリンをひいたりしていたのを、ケーベルに見いだされたのである。

カンタータ《海道東征》で知られる作曲家の信時潔（のぶとき きよし）の在学中の思い出によると、たいていの生徒は「ユンケル先生につかまって何か管弦楽の楽器をやらされた」。ことに管弦楽奏者は当時少なかったので、トランペットやらオーボエやらを勉強させられた。ユンケルは厳しく、ちょっと音程を間違えると、「You alone（君だけで！）」と一人ずつ何度でもやり直させ、大声で怒鳴ることもしばしばだったという。

しかし、その一方で彼は合奏の楽しみを生徒に植えつけた。ユンケル自身、幸田延や安藤幸（ともに幸田露伴の妹）、ヴェルクマイスター、ケーベル等が教室にいるのを見つけると、自分の授業を早く切り上げ室内楽の練習をするほどで、その情熱は生徒にも伝播した。初めて結成された生徒の弦楽四重奏団のチェロ奏者は、幸田修造（露伴の末弟）である。修造が早世すると山田耕筰が後を継ぎ、さらに山田がドイツに留学すると、信時がチェロを担当した。合奏の快楽に取り憑かれた彼らはベートーヴェンの弦楽四重奏曲のすべてをなんとかこなし、ブラームスの三曲はほぼ暗譜したというから、相当の熱の入れようだったことがわかる。

（たきい・けいこ／演奏芸術センター助手）

東京音楽学校オーケストラを指揮するユンケル。ヴァイオリンの最前列に、幸田延と幸田（安藤）幸が並んでいる。東京芸術大学附属図書館所蔵

1912

開かれた大学 2

TAP 取手アートプロジェクト

一九九九年から開催されている取手アートプロジェクトは、芸大取手キャンパスの教官・学生と、地域の人々が協同で運営するユニークな試みである。若手アーティストの育成に、大きな力を注いできた三年間の歩みを振り返る。

右：「時の堆積」島田忠幸

取手リ・サイクリング アートプロジェクト 1999

1999年4月の先端芸術表現科の設立を契機に催された第1回のプロジェクト。出品作品は前年10月に一般公募されたものから15点が選ばれた。町中に展示された多彩なアート作品を、観客は取手駅前に設置された色とりどりのリ・サイクル自転車に乗って、サイクリングを楽しみながら見て回るという、ユニークな鑑賞法が試みられた。ふだんは馴染みの薄いアートに親しみつつ、取手の町を再認識する機会を提供しようという試みである。

「取手リ・サイクリングアートパレット」JR取手東口駅前放置自転車をリ・サイクルして作られたこの作品は常設され、TAPのシンボルとなっている

TAP99「屋台をつくろう！」村山華子
出品作家の村山華子は、翌年、先端芸術表現科に入学

取手リ・サイクリング アートプロジェクト 2000

茨城県取手市は、東京のベッドタウンとして、新旧が混在した多様な表情を持っている。2000年のプロジェクトでは「家・郊外住宅」と題して、住空間をモチーフにした作品を募った。内外から応募された131点の作品プランを展示するプロポーザル展と、その会期中に開かれた公開選考会によって、6人の作家を選出。３人の招待作家の作品と合わせて、「住むこと」に対してさまざまな問題を提起する斬新な作品が取手に展開した。

TAP2000プロポーザル展　公開選考会風景／磯崎新（建築家）今福龍太（文化人類学者）らゲスト審査員を迎えて公開で行なわれた

「Toride city 2000」ホンマタカシ／制作中の作者と先端芸術表現科学生

RE CYCLING ART PROJECT

リ・サイクリングアートプロジェクト　ロゴマーク　日比野克彦デザイン

「TAP 取手アートプロジェクト」について

渡辺好明

「取手アートプロジェクト」（通称TAP）は、一九九九年、東京芸術大学取手校地に発足した先端芸術表現科の提案により取手市で始められた文化事業です。本学（先端芸術表現科）と取手市行政機関（取手市役所、教育委員会、文化事業団、商工会）、そして市民（アート取手）が三位一体となって実行委員会をつくり、若いアーティストが育つために必要な機会を提供し、市民のアートに対する関心と意識を高め、地域における芸術文化の活性化を目指して、さまざまなアートプログラムの企画と運営を行なっています。二〇〇〇年からは、公募による野外アート展「取手リ・サイクリングアートプロジェクト」と取手在住作家等による「オープンスタジオ＝取手」が、毎年交代で開催されています。先端芸術表現科ではTAPを実践的教育の機会と捉え、授業の一環として取り組んでおり、毎年多くの学生が参加しています。

TAP2000「取手リ・サイクリングアートプロジェクト」では、「家　郊外住宅」をテーマに、家そのものを使った大がかりなアートプロジェクトが、招待作家と全国公募で選ばれたアーティストにより市内各所で実現され、各方面から大きな反響をいただきました。

今年、TAP2001「オープンスタジオ＝取手」では、十一月二十四日～十二月九日の会期中、取手市在住作家のアトリエを公開する「オープンスタジオ」と、ニューヨーク在住のアーティスト、リチャード・ノナスを招聘して行なわれた「アーティスト・イン・レジデンス」をメインに、さまざまなゲストを招いての公開シンポジウム、取手市小学一年生全員による児童画展（市内全域の商店店頭に展示）、市民や子供を対象としたワークショップ、フリーマーケットなどが行われ、アートを幅広く楽しめる内容となっていました。

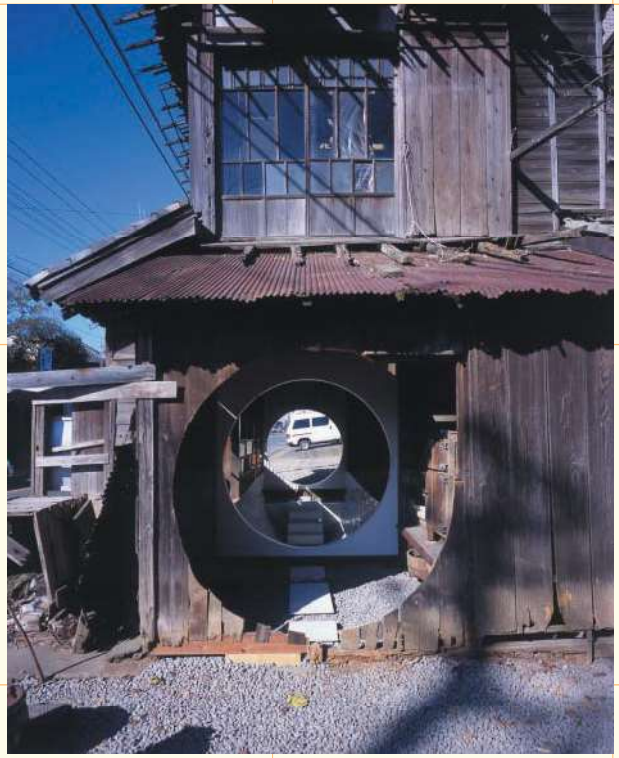
また一過性のイベントに陥ることのないよう、年間を通して市民公開セミナーやワークショップ、シンポジウム、先端芸術表現科の授業公開などが継続的に行なわれて、関係者相互の意識の共有化が計られています。

（わたなべ・よしあき／美術学部先端芸術表現科助教授）

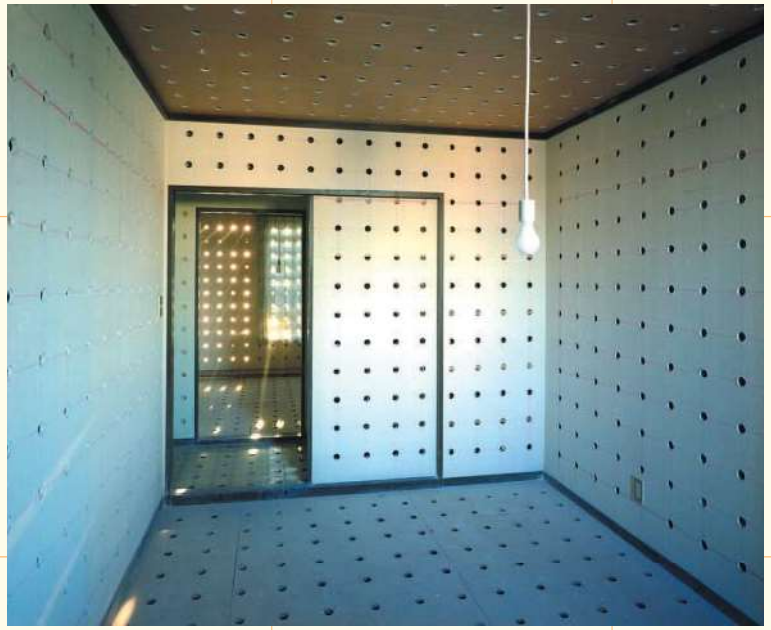
これら取手アートプロジェクトの詳細については、インターネットホームページを通じて逐次紹介されています。
URL:http://www.toride-ap.gr.jp
E-mail:tap-info@ima.fa.geidai.ac.jp

右：「REmain in Light 」西島治樹／この作品は、リンツ（オーストリア）のアルスエレクトロニカでメディアアート大賞候補に選ばれた。
上：制作中の作者と先端芸術表現科学生

制作を手伝う先端芸術表現科学生



上：「タイムトンネル」田中大造＋山嵜一也



「ウチを開く」北川貴好

上：学生と打ち合わせを行なうレジデンスアーティストのリチャード・ノナス（上野キャンパス）　下：「オープンスタジオ」工藤晴也助教授（壁画）の工房では様々なモザイク材料を見ることができた

「オープンスタジオ」アトリエ蔵
本学出身の３人の石彫家が農協から提供された穀物倉庫を共同スタジオとして改装して使っている

オープンスタジオ　ロゴマーク
日比野克彦デザイン

取手アートプロジェクト 2001

2001年のメイン企画は「オープンスタジオ in 取手」取手市と同市に隣接する竜ヶ崎市、藤代町、利根町に在住するアーティストの制作現場を訪ねて、芸術創造の現場を体験しようという試みである。趣旨に賛同してアトリエを解放したアーティストは、芸大の助教授や卒業生から、地元の彫刻家、工芸家等さまざま。取手市の奥深さを感じさせた。先端芸術表現科・木幡和枝教授によるG.M.C（ゴードン・マッタ=クラーク検証プロジェクトの一環として、リチャード・ノナスによる〈アーティスト・レジデンス〉も開かれた。

チェス盤の上に置かれた、高さ約120センチのチェスの駒。ジョヴァンニ役の学生は、チェスについての予習を求められた

オペラ・プロジェクト「ドン・ジョヴァンニ」

モーツァルトのオペラの舞台を、現代日本に設定してみたら！？
斬新な演出のもと、昨秋に上演されたオペラ・プロジェクト
「ドン・ジョヴァンニ」――出演学生がその舞台裏を語る。

芸大定期・オペラ「ドン・ジョヴァンニ」は2001年10月8日（月）昼の部・夜の部、10月9日（火）夜の部の計3回上演された

3回公演とも異なった演出、音楽学部と美術学部の共同制作など、今までには画期的な試みが実現した

奏楽堂を使った練習風景。中央が、演出の實相寺教官

10月9日の部の練習風景（写真右）と主な出演者。左写真左端は指揮の若杉弘教官

現代のおもちゃ箱「ドン・ジョヴァンニ」

泉貴子

二〇〇一年（平成十三年）十月八、九日、芸大定期・オペラ「ドン・ジョヴァンニ」が奏楽堂で上演されました。

「今回のオペラは現代版。服装はユニクロのような感じで、ふだん着でいきたいと思います。ほんらいのドン・ジョヴァンニのオペラに出てくるスペイン風なワインの飲み方など、そういうことは知らなくて結構です。宴のシーンの食べ物はハンバーガーなどファスト・フード的なものを考えています。ワインは缶ビールにします。それから舞台の床はチェス盤にして、ところどころに一二〇センチぐらいのチェスがあると思いますのでそれを歌うときに、使ってください。とくにドン・ジョヴァンニ役の方はチェスについて勉強しておいてください」。

これが最初に演出の實相寺先生からの説明でした。

現代版というのは早くから伺っていましたが、まさか服装もふだん着同然になるとは!? だれもが驚きの色を隠せませんでした。その他にも今年は例年とは異なることが多い異例づくしでした。たとえば日程の変更、そして初めての三回公演、音楽学部と美術学部の共同制作。当初はとまどいがちな練習の日々が続きました。

舞台に立つ側の私たちにとって、とても新鮮に感じられたのは三回公演それぞれ異なった演出だったということではないでしょうか。個性を重視しようという考えのもと、衣装も各組で話しあって決めることになりましたし、舞台の大道具だけが変わらないものの、キャストが持って登場する小道具も組によって全く違いますし、当然のごとく役柄の解釈も三通り生まれました。そういった面でほかのオペラでは味わえない経験だったと思います。実際私自身、自分とは違う組のゲネプロを観たときに、まるで別の演目のオペラを観ている感を受けました。

観にいらしていただいた方々からは、「おもしろかった。とにかく楽しい舞台だった」という声が多かったようです。オペラが始まって序曲中に浮かび上がってくるチェス。そしてそこに現れるのはキックボードで走り回る少年、地面に座り込んでたむろする少年、携帯電話でメールをしながら歩いてくる少女、その中を登場してくるドン・ジョヴァンニとノートパソコンを手にしたレポレッロ。そしてそれに引き続き西部劇を思わせる騎士長とドン・ジョヴァンニの決闘シーン。その他銃を持って復讐を誓い合うドンナ・アンナとドン・オッターヴィオ。スーツケースを曳いて登場するドンナ・エルヴィーラに、風船やビデオカメラを持って出てくるツェルリーナとマゼット。まるで現代を象徴するおもちゃ箱をひっくり返したかのように、さまざまな物が飛び出しました。次は何が出てくるのだろう、そんな楽しみ方も聴衆側にはあったようです。

歌って演技して舞台に立つということは、さまざまなことが要求され必要とされます。その上、自分たちの身につける衣装、持つ小道具など、演じようとするキャラクターに合わせた物を自らで選択して決めていくということは、正直いって大変なことでした。しかし自分たちで納得いくまで話し合って、創り上げていくことに達成感というものが今までのオペラ公演よりも大きく感じられた気がします。

美術の先生方をはじめ、院生の方々に制作していただいた騎士長像、仮面、チェスの駒などが舞台上にあり、またオーケストラピットからは指揮者の若杉先生とオーケストラの先生方が、舞台裏からも多数の先生方やスタッフの方々が私たちを支えてくださいました。

ひとつの舞台上で音楽と美術が融合し、一体化したのです。これぞ芸大ならではのオペラ、総合芸術ではないでしょうか。そうそう忘れてはならない字幕だって院生の方のお手製なんですから。大学内で共同制作が可能な、ある意味で「自家製オペラ!?」。ぜひこれからも伝統として残っていってほしいものです。

さて来年は「ウィンザーの陽気な女房たち」と聞いております。いったいどんな舞台が繰り広げられるのでしょう。乞うご期待です。

（いずみ・たかこ／大学院音楽研究科修士課程二年オペラ専攻）

芸大定期・オペラ　第47回
「ドン・ジョヴァンニ」
W.A.モーツァルト作曲
ロレンツォ・ダ・ポンテ台本

指揮：若杉弘　演出：實相寺昭雄

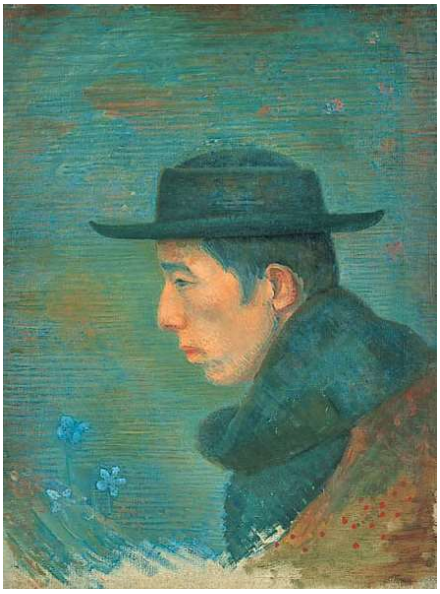
美　術：唐見博
照　明：牛場賢二
ムーブメント：柴田恵理子
舞台監督・演出助手：賀川祐之
演出助手：中村由利
舞台監督助手：小野寺東子　葛西伸一
山崎朝子　本杉美緒
言語・表現アドバイザー：
U．ガルディーニ
G．N．ピリウッチ
字　幕：宮本益光
指揮補：田中良和　小田野宏之
副指揮：樋本英一
副指揮・合唱指揮：千葉芳裕
合唱指揮：桑原英明
チェンバロ：大藤玲子
コーチ：大藤玲子　勝郁子　田中梢
鳥井俊之
出　演：東京芸術大学大学院音楽研究科
声楽専攻学生
東京芸術大学音楽学部オペラ
研究部
合　唱：東京芸術大学音楽学部声楽科
3年生（オペラ専攻）
オーケストラ：東京芸術大学音楽学部
管弦楽研究部

〈洋画〉の青春群像

―油画の卒業制作と自画像

自己を探求する重要なメディア

野口玲一



岡鹿之助「自画像」

大沢昌助「姉妹」

絵画科はもちろん、彫刻科、今では工芸科も、卒業制作の課題に自画像を加えています。卒展（卒業制作・修了制作展）に出品された卒業制作の傍らに掲げられた自画像は、作家の人となりを知るよすがとなり、作品に対する親近感を深めてくれるでしょう。

とはいうものの、定番となって今日とくに不思議とは思われない「卒業制作プラス自画像」という出品形式は、どのようにして成立したのでしょうか。卒業にあたり、卒論に相当する卒業制作を行うことに特に不思議はありません。ところが自画像については、どのような経緯で卒業制作の課題に付け加えられたのか、実はよくわかっていないのです。

東京美術学校西洋画科では、一八九六年（明治二十九）開設当初から、カリキュラムの四年次に卒業制作があてられていました。卒業制作の収蔵は、今日に至るまで続けられています。これは一八八九年（明治二十二）の東京美術学校の開設とともにおかれた、絵画科（日本画科）に倣ったのでしょう。ただし特筆すべきは、西洋画科においては卒業制作にあわせて、自画像の制作も課されるようになったことです。

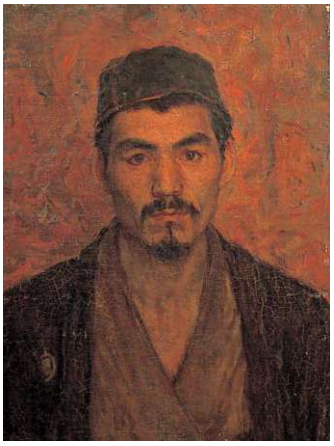
東京芸術大学には、一八九九年（明治三十二）の西洋画科最初の卒業生からの自画像が残されています。はじめは学生の一部だけでしたが、一九〇三年（明治三十六）からは、西洋画科すべての学生の自画像が残されるようになりました。その後西洋画科は油画科・油画専攻となりましたが、戦争による一九四三―四九年（昭和十八―二十四）、予算難による一九五五―七七年（昭和三十―五十二）という二回の中断の時期をのぞいて、自画像の収集は今日まで連綿と続き、東京芸術大学の収蔵作品の大きな核となっています。

これらの卒業制作・自画像は、作家の若い時期の姿を偲ぶばかりでなく、作家のある年齢における技法を分析する際の基準作例となり、研究上も重要な意味を持っています。とりわけ自画像については、はじめはおそらく単なる記録・記念として始められたものが、明治末年から大正期にかけると、画家にとって自己を探求する上での重要なメディアへと変貌することになります。自画像が画家にとって真摯に取り組むべきジャンルとなったのです。それによってこれらの自画像群は、日本近代の美術史を考える上で重要な資料となっています。

本展では、とくに西洋画科開設当初から一九五四年（昭和二十九）までの油画の卒業制作・自画像に焦点をしぼり、それらを検証することで、この時代の美術と作家の姿を浮かび上がらせることを試みます。

（のぐち・れいいち／大学美術館助手）

小磯良平「自画像」



熊谷守一「自画像」

アフガニスタン一〇〇〇年の歴史（仮称）

アフガニスタン文化財復興支援

「文明の十字路」から生まれた至宝を、再発見する

竹内順一

大学美術館では、来る七月十六日（火）から九月十六日（日）の五十五日間にわたって（毎月曜日休館）にわたって、「アフガニスタン一〇〇〇年の歴史」（仮称）――アフガニスタン文化財振興支援――という特別展をNHK・朝日新聞社共催で開催します。この展覧会は、現在、フランス国立ギメ東洋美術館（パリ）で三月一日から五月七日まで行われており、それを日本で公開するものです。

本特別展は、紀元前のバクトリアの塑像から三・四世紀のハッダの石像、さらには八世紀のバーミヤン陶器などアフガニスタンの地で育まれた美術工芸を約二〇〇点でたどるものです。

アフガニスタンは「文明の十字路」といわれ、古代から文化の東西交流の要地でした。ところが周知のとおり、一九八九年のソ連撤退後の内戦やタリバンの強固な偶像崇拝禁止策のために、アフガニスタンの文化財の多くが破壊されてしまいました。著名なバーミヤンの巨大石仏遺跡が世界の世論を無視して、昨年三月砲弾によって崩壊されたことは人々の記憶に新しいところです。

この展覧会は、すでにスペインのバルセロナで開催されヨーロッパの注目を集めました。出品作品は、ギメ東洋美術館をはじめ人類博物館、ドイツのインド美術館、アメリカのサックラー美術館、あるいはフランスの個人コレクションなど欧米有数の東洋コレクションが一同に会するものです。またアフガニスタンの国立カブール博物館の所蔵品で一時ギメ東洋美術館に保管されているものも含まれています。

平山郁夫学長は、かねてから内乱で流出した文化財を「文化財難民」ととらえ、自らの手で保護し、ユネスコ親善大使の立場から国際世論に、「アフガニスタンの文化財を保護することは、アフガニスタンの人々の人間性をとりもどすことになる」と訴えてきました。この緊急避難された「文化財難民」も三十余点特別に出品されます。将来、カブール博物館が再建され、安全が確保されたあかつきには、無償返還することになっています。

本展によって、シルクロードの一翼をになった文化交流の地、アフガニスタンの多様な歴史を多くの人々に知っていただくとともに、東京芸術大学の文化財保護という国際貢献のあり方を、広く世に訴える機会にしたいと考えています。

（たけうち・じゅんいち／大学美術館教授）

芸大コレクション展

四万五千点にのぼる収蔵品の中から展示する

小野寺玲子

大学美術館は、東京美術学校設置以来収集されてきた美術作品を所蔵しており、その数は約四万五千点にのぼります。すべての作品がいつでも観覧できるというわけにはいきませんが、その中から一部を常設展示し、学生だけでなく一般の方々にも、良質な作品の持つ味わいを楽しんでいただきたいと思っています。

一度に展示できる数は五十点ほどですが、作品保護のため、日本画や水彩画、素描などはおよそ一ヶ月毎に展示替えをします。

出品の内容については、ホームページか館内および守衛所に置いてありますチラシ、またはハローダイヤルをご利用ください。

（おのでら・れいこ／大学美術館助手）

狩野芳崖「悲母観音」

展覧会予定

（2002.4〜2003.3）

大学美術館本館

芸大コレクション展（展示替えあり）
4月9日（火）〜8月4日（日）　入場料300円
「悲母観音」特別展観　4月9日（火）〜5月12日（日）／菱田春草・横山大観ほか　5月14日（火）〜6月23日（日）／「靴屋の親爺」とその周辺　6月25日（火）〜8月4日（日）

〈洋画〉の青春群像―油画の卒業制作と自画像―
4月26日（金）〜6月30日（日）　入場料700円

（仮）アフガニスタン1000年の歴史展―アフガニスタン文化財復興支援―
7月16日（火）〜9月16日（日）　有料

特別陳列「竹内久一と石川光明」―明治の彫刻展―
8月13日（火）〜9月16日（日）　入場料300円

開館3周年記念「ウィーン美術史美術館展〜ルネサンスからバロック〜」
10月5日（土）〜12月23日（月）　入場料1300円

退官記念展（2教官）
1月9日（木）〜1月26日（日）　入場無料

第51回卒業・修了制作展
2月21日（金）〜2月26日（水）　入場無料

陳列館

（仮）大学院美術研究科博士後期課程研究発表展
4月3日（水）〜5月26日（日）
12月〜2月の間　入場無料

（仮）吾妻兼次郎デッサン展
7月上旬　入場無料

建築科椅子展
9月中　入場無料

（仮）研究室展（油画）
10月上旬〜10月下旬　入場無料

伊藤廣利遺作展
11月7日（火）〜11月24日（日）　入場無料

取手館

美術学部取手校地制作展
12月7日（土）・8日（日）　入場無料

※開館時間は、いずれも10時〜17時。月曜日休館。ただし月曜日が祝日の場合、開館することがあります。
※展覧会の名称・会期については、変更することがあります。
※本学には駐車場はありませんので、お車でのご来館はご遠慮ください。
※展覧会についてのお問い合わせ
東京芸術大学大学美術館
Tel.03-5685-7755
NTTハローダイヤル
Tel.03-5777-8600
※展覧会の紹介は、下記ウェブサイトでごらんになれます。
http://www.geidai.ac.jp/museum/

春から夏への奏楽堂 2002.4>>>2002.6

邦楽総合アンサンブル研究「熊野の物語」

能の名曲を、斬新な発想で捉えなおす

増渕任一朗

邦楽には、古来〈舞〉と〈音楽〉の様式がすでに完成された「雅楽」、「能楽」のほか、民族芸能も含めさまざまな表現スタイルが整っております。その上楽器も多様であり、声種等も多岐に分かれております。同種楽器が同じ構造を用いながら、さらに日本人の特性である音色へのこだわりから、楽器の音味や声の色艶両面を強調し、より新しい音楽創りをしてきた経緯があり、従って取り扱う題材に重複するものも数多くあります。

邦楽科では、演奏研究を発表する機会を通して、同テーマによるプログラム編成をかねて考えておりましたが、本学定期演奏会では、教官と学生が舞台を同じくすることが教育の主眼であることを優先し、企画を立案するまでの状況に至りませんでした。しかし、大学院（修士・博士課程）レベルも充実し、学部レベルから科全体にアンサンブル部門を強化してゆく方向も必要であり、今後の教育指針の一つでもあると考えます。

今回の企画は、科の方向性を示すとともに、舞台芸術としての試みも意図しており〝音楽と視的表現〟といたしました。

「熊野」を邦楽各ジャンルに関わる題材として、採り上げました。斬新な発想で新たに脚色、現代性とさまざまなアイデアを駆使した千野喜資氏の台本を基に、舞台構成を演ずる立場から能楽・野村四郎教授が、音楽構成を尺八・山本泰正教授が担当し、総合アンサンブル面で音楽創りを進めていくものです。

新たな試みについて挙げるならば、

一、音楽と視的表現としての舞台芸術
二、伝統歌唱と現代化としての言語表現
三、伝統歌舞と創作曲との舞台表現
四、伝統曲と創作曲の総合表現

がその特色であります。

本公演には、総合企画の上で實相寺昭雄・演奏芸術センター長、舞台美術に美術学部・伊藤隆道教授のお二方のお力添えをいただき、私ども常勤教官が全員参加するほか、非常勤講師や大学院生も加わった大編成で取り組みます。

最後に、この「熊野の物語」を通し〝日本人として残したいもの〟をテーマに、青少年層にも、また邦楽教育の立場では小・中・高校の音楽教師も鑑賞の対象にと考えております。

（ますぶち・じんいちろう／音楽学部邦楽科教授）

歌シリーズ2002 イタリア歌曲のタベ I

一晩でわかるイタリア歌曲の流れ

嶺貞子・鈴木寛一

大好評のうちに終了しました〈日本歌曲の流れ〉全四回に続く、「歌シリーズ2002」が始まります。〈日本歌曲の流れ〉では、四回にわたって百年の歴史を、また的確に考えられた構成のもと、素晴らしい演奏の展開に、ご満足いただけたことと思っております。

さて、「歌シリーズ2002」、五月十八日（土）の第一回は〈イタリア歌曲のタベ〉です。イタリアといえばオペラに尽きますが、今回は歌曲に焦点を絞りました。「カーロ　ミオ　ベン」「ニーナ」等、声楽愛好家からプロの声楽家にまで、広く親しまれ、愛唱されている古典歌曲は、本来オペラ、カンタータ、オラトリオなどのアリアなのですが、イタリアの音楽学者パリゾッティ（A.PARISOTTI　一八五三～一九一三）によってロマン派様式に具現されました。過度な声、表現は必要とせず、磨きぬかれた宝石のように歌わなければならない作品は、私たちの勉強に大きな位置を占めています。代表的な作曲家にモンテヴェルディ、ヴィヴァルディ、スカルラッティなどがあげられます。

一八〇〇年代、オペラに支配され、オペラ全盛の時代、ロッシーニ、ドニゼッティ、ベッリーニ、ヴェルディ等の作曲家によるサロンのための歌曲が多く作曲されました。それらは、小さなアリアのように愛らしく、メロディックな作品で多くの人たちに愛唱されてきました。

そしてロッシーニ以降、およそ一世紀にわたって繁栄したイタリア・オペラは、二〇世紀に入ると、ロマン主義から脱した新しい展開をみせます。イタリア音楽の近代ルネッサンスです。イタリア近代芸術歌曲（リーリカ・ダ・カメラ）はこの中で誕生しました。これらの歌曲は、それまでの「声」「メロディー」を中心としたあり方から転じて〝詩の精神（心）を歌う〟音楽性を尊重しています。この時代の代表的な作曲家にアルファーノ、レスピーギ、ピッツェッティなどがあげられます。

イタリアのリーリカはドイツやフランスの歌曲のように広く知られていませんし、作品の数も決して多くはありませんが、自然の語らいの中に命が躍動し、多彩な光と影が、限りない情感の世界へ導いてくれることでしょう。

（みね・さだこ／音楽学部声楽科教授　すずき・かんいち／音楽学部声楽科教授）

〝うた〟シリーズ2001より

奏楽堂演奏会予定
(2002.4〜2003.3)

定期演奏会・特別演奏会予定

4月16日（火）
"世界のマエストロを迎えて"
第1回　ロジェストヴェンスキー
18:30開演　　1,800円（自由席）
［曲目］オラトリオ「四季」（ヨーゼフ・ハイドン）
［指揮］ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー
［合唱指揮］栗山文昭
［ソリスト］永崎京子（ソプラノ・ハンネ）／土崎譲（テノール・ルーカス）／小野和彦（バス／ジーモン）
［合唱］音楽学部声楽科学生
［管弦楽］管弦楽研究部
後援：読売新聞社

4月18日（木）
モーニングコンサート 第1回
11:00開演　入場無料
［曲目］白鳥の肉を焼く男／白鳥踊りの人（P.ヒンデミット）
［ヴィオラ］福田タチアナ千尋

4月19日（金）
同声会新人演奏会 第1回（声楽・弦楽）
18:00開演　1,500円（自由席）

4月25日（木）
モーニングコンサート 第2回
11:00開演　入場無料
［曲目］左手のためのピアノ協奏曲（M.ラヴェル）
［ピアノ］前田健治
［曲目］アルトサクソフォンと11の楽器のためのに室内小協奏曲（J.イベール）
［サクソフォン］東 涼太

4月27日（土）
同声会新人演奏会 第2回（ピアノ・チェンバロ・邦楽）
14:00開演　1,500円（自由席）

4月27日（土）
同声会新人演奏会 第3回（声楽・管打）
14:00開演　1,500円（自由席）

4月30日（火）
学生オーケストラ学内演奏会
11:00開演　入場無料

5月 3日（金）
邦楽科新企画（音楽と視的表現）「熊野（ゆや）の物語」―日本人として残したいもの―
18:30開演　1,800円（自由席）
［脚本・構成］千野喜資
［舞台構成］野村四郎
［舞台構成補］笠井賢一
［音楽構成］山本泰正
［舞台芸術］伊藤隆道
［総合企画］實相寺昭雄
［邦楽企画］増渕任一朗
［演奏］邦楽科教官・邦楽専攻大学院生

5月9日（木）
モーニングコンサート 第3回
11:00開演　入場無料
［曲目］ヴァイオリン協奏曲 第1番 a-moll イ短調 作品77（D.ショスタコーヴィチ）
［ヴァイオリン］吉岡麻貴子

5月16日（木）
モーニングコンサート 第4回
11:00開演　入場無料
［曲目］ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47（J.シベリウス）
［ヴァイオリン］赤坂加奈
［曲目］トロンボーン協奏曲（H.トマジ）
［トロンボーン］清澄貴之

5月18日（土）
歌シリーズ2002 イタリア歌曲のタベⅠ
18:30開演　1,800円（自由席）

5月23日（木）
モーニングコンサート 第5回
11:00開演　入場無料
［曲目］2本のフルートとオーケストラのための交響協奏曲 ト長調（F.ドゥヴィエンヌ）
［フルート］安原三保子・池辺昇平
［曲目］ヴァイオリン協奏曲 第2番 作品61（K.シマノフスキ）
［ヴァイオリン］佐々木倫子

5月25日（土）
「オルガンコンサートシリーズ」 第1回
11:00開演　入場無料

5月23日（木）
モーニングコンサート 第6回
11:00開演　入場無料
［曲目］ハープ小協奏曲 作品39（G.ピエルネ）
［ハープ］稲川美穂
［曲目］フルート協奏曲（C.ニールセン）
［フルート］横山蘭子

5月31日（金）
学生オーケストラ学内演奏会
17:30開演　入場無料

6月4日（火）
芸大定期 邦楽第64回
18:30開演　1,800円（自由席）

6月14日（金）
芸大定期 オーケストラ第298回
"新卒業生紹介演奏会"
18:30開演　1,300円（自由席）

6月23日（日）
舞曲の系譜Ⅲ
15:00開演　1,800円（自由席）

6月28日（金）
芸大定期 オーケストラ第299回
19:00開演　1,800円（自由席）

6月29日（土）
「オルガンコンサートシリーズ」 第2回
18:00開演　1,800円（自由席）

7月1日（月）
学生オーケストラ学内演奏会
17:30開演　入場無料

7月3日（水）
吹奏楽学内演奏会
17:30開演　入場無料

7月4日（木）
モーニングコンサート 第7回
11:00開演　入場無料
［曲目］クラリネット協奏曲 第2番 変ホ長調 作品74（C.M.v.ウェーバー）
［ピアノ］川井夏香
［曲目］ピアノ協奏曲 第2番 ヘ短調 作品21（F.ショパン）
［ピアノ］根津理恵子

7月6日（土）
歌シリーズ2002　第2夜
18:30開演　1,800円（自由席）

7月11日（木）
モーニングコンサート 第8回
11:00開演　入場無料
［曲目］ヴァイオリン協奏曲 ニ短調 作品47（J.シベリウス）
［ヴァイオリン］門脇大輔

［曲目］2台のピアノのための協奏曲 ニ短調（F.プーランク）
［ピアノ］木村華子・鈴村真貴子

7月11日（木）
「ステファンスカ先生追悼演奏会」
18:30開演　1,800円

7月18日（木）
モーニングコンサート 第9回
11:00開演　入場無料
［曲目］ホルンと管弦楽の為の協奏曲（K.アッテルベリ）
［ホルン］伴野涼介
［曲目］ピアノ協奏曲 第1番 変ロ短調 作品23（P.チャイコフスキー）
［ピアノ］鈴木慎崇

9月5日（木）
モーニングコンサート 第10回
（作曲科学生作品）
11:00開演　入場無料

9月7日（土）
歌シリーズ2002　第3夜
18:30開演　1,800円（自由席）

9月12日（木）
モーニングコンサート 第11回
（作曲科学生作品）
11:00開演　入場無料

9月13日（金）
芸術祭(学園祭)演奏会
開演時間未定　入場無料

9月21日（木）
「オルガンコンサートシリーズ」 第3回
18:00開演　1,800円（自由席）

10月10日（木）
芸大定期 オペラ第48回 第1日
18:30開演　2,400円

10月11日（金）
芸大定期 オペラ第48回 第2日
18:30開演　2,400円

10月25日（金）
芸大定期 オーケストラ第300回
19:00開演　1,800円

10月29日（火）
学生オーケストラ学内演奏会
17:30開演　入場無料

10月31日（木）
附属音楽高等学校定期演奏会
18:00開演　整理券

11月2日（土）
歌シリーズ2002　第4夜
18:30開演　1,800円（自由席）

11月5日（火）
室内楽演奏会 第1夜
18:30開演　1,300円（自由席）

11月8日（金）
室内楽演奏会 第2夜
18:30開演　1,300円（自由席）

11月10日（日）
「オルガンコンサートシリーズ」 第4回
15:00開演　1,800円（自由席）

11月22日（金）
芸大定期 合唱・オーケストラ第301回
18:30開演　1,800円（自由席）

11月29日（金）
芸大定期 オーケストラ第302回〜学生オーケストラ演奏会〜
18:30開演　1,300円（自由席）

12月3日（火）
芸大定期 邦楽第65回
18:00開演　1,800円（自由席）

12月4日（水）
芸大定期 吹奏楽第68回
18:30開演　1,300円（自由席）

1月26日（日）
「ピュイグ・ロジェ先生追悼演奏会」
15:00開演　1,800円（自由席）

2月12日（水）
芸大定期 室内楽第29回　第1日
18:30開演　1,300円（自由席）

2月13日（木）
モーニングコンサート 第12回
11:00開演　入場無料
［曲目］ピアノ協奏曲 第1番 変ホ長調（F.リスト）
［ピアノ］山本佳澄
［曲目］ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品83（J.ブラームス）
［ピアノ］大川香織

2月13日（木）
芸大定期 室内楽第29回　第2日
18:30開演　1,300円（自由席）

2月16日（日）
舞曲の系譜Ⅳ
15:00開演　1,800円（自由席）

2月23日（日）
楽器シリーズⅢ
15:00開演　1,800円（自由席）

※平成14年3月5日現在の予定表です。今後、演奏会の曲目・出演者については、変更することがあります。
※演奏会の曲目、開演時間等の詳細については、決定次第、大学ホームページで発表します。
http://www.geidai.ac.jp
※本学には駐車場はありませんので、お車でのご来場はご遠慮ください。
※チケットの取り扱い
チケットは、演奏会の概ね2ヶ月以前から下記で発売します。チケットぴあ03-5237-9990／東京文化会館チケットサービス03-5815-5452／東京芸大大学美術館ミュージアムショップ03-5685-1176
※チケット・演奏会等のお問い合わせ先
音楽学部演奏係　03-5685-7700

東京芸術大学広報誌 藝大通信 no.02 MARCH 2002 編集発行 東京芸術大学広報委員会